テ・アタアランギとマオリ語復興

岡崎　享恭

マオリ語復興の流れは、40年以上の年月を経ている。1960年代に、マオリ語は話者数の激減から、その存続が危ぶまれていた。ほとんどの話者が60歳以上となり、このままでは残り数十年で話者がいなくなると考えられる状況であった。1970年代より、言語復興運動に取り組んだマオリの動きは成功例と見られ、同じポリネシア系のカナカ・マオリ（ネイティブハワイアン）だけでなく、ナバホをはじめとする北米ネイティブアメリカン、また北欧のサーミ、また日本のアイヌなど、世界中の先住民族言語の復興を目指す人々に、希望とインスピレーションを与え続けている（McCarty 2003；岡崎 2011；アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書作成委員会 2013）。中でも、言語の巣運動として知られるマオリ語母語話者の年長者を中心にマオリ語イマージョンの保育園を作ったTe Kōhanga Reo（テ・コーハンガ・レオ；以下コーハンガ・レオ）は世界的な注目を浴び、ハワイにおいてPūnana Leo（プーナナ・レオ）として同様のムーブメントが生まれ、世界中でそのアプローチが試みられた。またマオリも世界中の危機言語復興運動から影響を受けており、例えば、1967年成立のイギリスのウェールズ語法や、1978年のアイルランドのゲール語法であるボード・ナ・ゲーリッジ法を参照に、また北欧サーミの言語文化サーミの言語文化の立法措置が影響を与え、1987年のマオリ言語法が成立している（松原 1994）。

マオリ語復興運動の動きを捉えるとき、上述のコーハンガ・レオの動きを中心に語られることが多い。1982年にその第一号の保育園が、ウェリントンに誕生して以来コーハンガ・レオは、ニュージーランド全土に460以上あり、またオーストラリアやイギリスにも存在する（Te Kohanga Reo National Trust 2014）。これまで世界的に注目を集めてきたコーハンガ・レオに比べるとその取り組みが取り上げられることは少ないが、マオリ語復興を草の根レベルで牽引し、また現在も支え続けているのがテ・アタアランギである。国際的な先行研究を見ても少ないが、特に日本国内の研究では、コーハンガ・レオ（松原 1994；伊藤 2007）やそれに続く初等教育でマオリ語イマージョンを行うクラ・カウパパ・マオリ（松原 1994；小林 2007）や、中等教育のファレクラ（アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書作成委員会 2013）、またワーナンガ（伊藤 2007）と呼ばれるマオリ大学など、学校教育の枠組みで理解されるマオリ語やマオリ学教育を取り上げた論考はあるものの、テ・アタアランギの取り組みが言及されたものは、筆者が知る限り存在しない。

学校教育や職業訓練で実践されるマオリ語教育で流暢に話せるようになったマオリ語話者は多いものの、実社会の様々な場面では、英語のみを使用し、マオリ語運用能力が下がるケースも多い。実際、マオリ語が日常生活の言語として使用されているケースは稀である（Pohe 2012）。そこで言語復興を社会全体で考えるとき、地域コミュニティでどれだけ話されるのか、またどのような取り組みが言語使用を維持しているかを考える必要があり、テ・アタアランギの果たす役割を無視することはできない。

そこで本稿では、過去40年に渡るマオリ語復興を概観し、その中で、マオリ語を話さない大人を主な対象とし、マオリ語復興とマオリコミュニティ再生に努めきたテ・アタアランギの動きに着目し、マオリ語復興の実態と今後の課題について考察を試みる。なお本研究のデータは、2013年1月末から2月中旬と2014年3月上旬から中旬までのニュージーランド北島、オークランドやハミルトン地域を中心とするフィールドワークならびに、テ・アタアランギ指導者（テ・アタアランギ協会理事エラナ・ブルワー

トン氏と同協会副代表ルアケレ・ホンド氏）の2013年8月下旬から9月中旬、2014年8月中旬から9月上旬の来日時の聞き取りや観察、さらにEメールやその他の先住民族関連の会議でのコミュニケーションから集めたものである。

マオリ語の衰退

19世紀初頭からの宣教師や貿易のために訪れたイギリス系の入植は、1840年にマオリとイギリス王権によって結ばれたワイタンギ条約[1]により加速する。条約の英語版より、ニュージーランドをイギリスの植民地と解釈したイギリス出身者の入植は激増し、1850年代後半にはニュージーランド北島のイギリス計入植者の数はマオリを上回った（山本 2007）。しかし当時は、聖書がマオリ語に翻訳されるなど、社会の様々な場面においてマオリ語使用が続いており、マオリとパケハ[2]は、必要な場面ではお互いの言語を使用するという二言語使用が見られていた（Spolsky 2009）。

1847年の教育条例や1867年に制定された原住民学校法によって、ネイティブ学校の教育は、英語のみで行われるようになり、教育内容もヨーロッパ文化に限定された（松原 1994；Hond 2013；Simon et al., 2001）。そのような状況であったものの、多くのマオリは、地方でコミュニティを作っており、コミュニティ内でマオリ語を使用していた。しかしながら、第二次世界大戦中、軍隊員や工場労働者として地方から都市に呼び寄せられたり、戦後も経済的な理由から、都市への移住が続いた。ホンド＆ブルワートン（2014）によると、マオリ人口の80%程度が1930年代には地方在住であったのに対し、1970年代には、25%程度に減少したというのだ。二人に一人のマオリが、四十年の間に、都市に移住したこととなる。ここでマオリ語に取って大きな喪失は、様々な地域から都市へ移住するマオリが、各地域の部族との繋がりを失ったことである。彼らは都市でもコミュニティを作ることは稀であったことから、各地域の方言はおろか、マオリ語自体を使用する機会が失われてしまったのである。親が子どもに英語でのみ話すようになり、英語しかわからない子どもが大人になる。1970年代

になると、60歳以上の人しか、マオリ語を流暢に話せず、マオリ人口全体の数パーセントとなってしまったという（ホンド＆ブルワートン，2014）。しかもその多くは、地域に残ったマオリであり、年に移住した大多数の人々、さらに地域に残った60歳未満のほとんどは、英語を母語とし、マオリ語は話せないようになってしまった。

マオリ語の復興

1972年9月14日、オークランドのマオリ学生運動団体、Nga Tamatoaが進めた運動で、マオリ語やマオリ文化の学習を希望する学生に機会を保障せよという趣旨の署名30,000人分が、Nga TamatoaとウェリントンのTe Reo Maori Society（マオリ語の会）によって国会に提出される（Te Rito 2008；松原 1994）。これは偶発的なものではなく、米国の公民権運動から世界各地で燃え上がった民族解放ムーブメントを背景に、マオリも1970年代、文化復興、権利回復のための草の根の運動を強めていた。Nga Tamatoaは、2月6日のワイタンギデーを中心に行われるワイタンギ条約不履行に対する運動、1975年のランドマーチと呼ばれる土地回復のための北島の最北端から南端までの行進や、バスティオン岬の不当な没収に抗議するための507日間に渡る平和的占拠など（アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書作成委員会，2013）が、その代表として挙げられる。上記のような草の根の運動が功を奏し、1975年のワイタンギ条約法が制定され、その条約に沿ってワイタンギ審判所が設立された。ワイタンギ審判所からの勧告により、1987年には、マオリ語法が制定され、マオリ語は英語と同等の公用語としての地位を得ることとなる。

マオリ語イマージョン教育

ここでは、1979年に産声をあげ、マオリ語復興のなかで中心的な役割を果たしたテ・アタアランギを考察する前に、コーハンガ・レオから始まった一連の学校教育のなかで成立しているマオリ語イマージョン[3]教育を概観する。

コーハンガ・レオ

保育園に年長者のマオリ語母語話者を呼び、マオリ語のみで育てるテ・コーハンガ・レオ（言語の巣）は、1982年に始まっている。前マオリ問題省大臣のピタ・シャープルズ（Sharples, personal communication 2013 January）によると、マオリ教育者や指導者ら120人が一同に会し、言語復興における最も効果的な方法として、マオリ語母語話者である年長者が、第一言語習得過程の幼児を集め、マオリ語イマージョンで保育を行うことだと提案したのが1981年のことである。その勢いはニュージーランド各地に広がり、誕生から一年後の1983年には100のコーハンガ・レオが誕生し、ピーク時の1994年には、800以上のコーハンガ・レオで、14,000人が学んでいた（Spolsky 2009）。現状では470程度と言われているが、保育園の一歩外に出れば、何もかもが英語で行われる社会において、マオリ語を母語のように、またマオリ文化を自然に習得させるコーハンガ・レオが果たす役割は計り知れない。コーハンガ・レオは、Whānau（ファーナウ）と呼ばれる大家族を基本としている。一般的にマオリの集合場所であるマラエに、地元の年長者と、10から20人ほどの幼児とその親が集い、マオリ語での保育を行う。そこに集う幼児は1歳から6歳までで、親は家に帰っても彼らにマオリ語で話すコミットメントが要求される。各地のコミュニティの取り組みとして始まったコーハンガ・レオであったが、現在ではコーハンガ・レオ全国財団を通して、政府からの資金的援助を受けているコーハンガ・レオがほとんどである。しかしテ・コーパエ・ピリポノ・マオリ幼児イマージョンセンター創始者の一人、教育心理学者のホンドフラヴェル（Hond-Flavell, personal communication February 2013）によると、援助を受ける上での、教育機関としての規制を好まず、自分たちのマラエで独自に行うコーハンガ・レオも存在し、政府や基金との付き合い方はさまざまである。

クラ・カウパパ・マオリとワーナンガ

上述のシャープルズによると、コーハンガ・レオが始まった当初、探しまわってもマオリ語で教えてくれる小学校はなかった。子どもらが英語の

みで教える学校に入ると、西洋的価値観で教えられる学校の中で、せっかく学んできたマオリ語やマオリ文化は多数派社会では使われておらず、二次的な存在として考えてしまうと考えた親達は、マオリ語イマージョン教育を行う小学校を自分たちのマラエで作るしかなかった。その第一号が1985年にできたオークランドにあるホアニ・ワイティティ・マラエのクラ・カウパパ・マオリ（マオリの理念による学校）である。コーハンガ・レオの受け皿であることからもわかるように、校内での英語使用を禁止し、マオリ語だけの初等教育、並びに中等教育を行っている。コーハンガ・レオと同じく、制度として存在しないマオリ語イマージョン教育を行う上で、設立当初は、政府からの支援は一切期待できず、自分たちで資金集めをし、教育を行った。1989年の教育法ができて以来、公立学校としての英語で教育がされる他の学校と同じように、クラ・カウパパ・マオリの経費は、政府の予算で賄われている。現校長のラウィリ・ライトによると、ホアニ・ワイティティ・マラエのクラ・カウパパ・マオリは、中等教育を行うファレクラをあわせて160人の生徒と、21人の教員がおり、マオリ語のみで指導しているという。さらに全国的に見ると、現在73のクラ・カウパパ・マオリがあり、6000人以上が学んでいる。

さらに、ワーナンガと呼ばれるマオリ大学も３つできている。テ・ワーナンガ・オ・ラウカワ（ラウカワ大学)、テ・ワーナンガ・オ・アオテアロア（アオテアロア大学)、テ・ファレ・ワーナンガ・オ・アワヌイアーランギ（アワヌイアーランギ大学）である。とりわけアオテアロア大学は、各地に小さなキャンパスを持ち、学生数34,000人を誇る。またアワヌイアーランギ大学は、博士課程を提供するなど、学術的な先住民族教育を行っている。これに加えて全国放送のマオリテレビは、マオリ語のみのチャンネルとマオリ語と英語の二言語のチャンネルと二つを有しており、マオリ語で放送するラジオ局も多数ある。

以上のように現在では、保育園から大学院までマオリ語で学べ、なおかつテレビやラジオからもマオリ語を聞くことができる。しかしながら、教育機関や放送機関さらに、マオリコミュニティでの儀式以外の社会におい

て、マオリ語を主に使うことは希有である。上述したクラ・カウパパ・マオリの卒業生達が家庭や社会で、マオリ語を話す場面が、ほぼ存在せず、マオリ社会とかけ離れた生活を送り、マオリ語運用能力が下がっている場合も多いという。社会言語学者バーナード・スポルスキーはこのような状況で、クラ・カウパパ・マオリの卒業生と、年長者のマオリ語母語話者たちをつなぎ合わせるものが、テ・アタアランギだと述べている（Spolsky 2009）。この新世代と年長者の間の世代こそが、マオリ語を習ってくることができなかった世代であり、テ・アタアランギのターゲットだからである。以下では、テ・アタアランギがどのようにして生まれ、どのような教育理念を持ち、現在までどのような成果をあげてきたか、さらにどのような課題を抱えているかについて詳述する。

テ・アタアランギ

誕生経緯（マタイラとペファイランギ）

テ・アタアランギの誕生は、上記のようなマオリ語復興運動の初期に起こり、コーハンガ・レオなどの学校教育に先んじ、ニュージーランド中のマオリコミュニティを取り込んだ言語、文化復興ムーブメントに大きな役割を果たしている。テ・アタアランギのムーブメントを牽引した共同創始者、カテリナ・テ・ヘイコーコー・マタイラとンゴインゴイ・テ・クメロア・ペファイランギはそれぞれマオリ語教師であり、マタイラはまたマオリ語作家、ペファイランギはコミュニティ指導者であった。ペファイランギは、マオリ省により、国全体の言語プログラムを開発するように依頼されていて、若者が各地のマラエを再建し、そこでマオリ語とマオリの慣習を学ぶプログラムを開発していた（Ka'ai 2008）。またマタイラは、マオリ語で物語や詩などの創作活動だけでなく、クラ・カウパパ・マオリの第一号、ホアニ・ワイティティ・マラエ校設立や、その後ニュージーランド中にできたクラ・カウパパ・マオリの教育理念の草案や採用にも重要な役割を果たしている（Spolsky 2009）。マタイラは、2009 年にマオリ文学財団から、マオリ語への翻訳やマオリ語での創作を讃えられピキフイア賞（The Maori

Literature Trust 2009)、また2011年にはエリザベス女王の誕生日に送られるニュージーランド・メリット勲章を、マオリ語への貢献に祝福され受賞し、デームの称号を得ている（Waikato Times 2011)。彼女は2011年7月に亡くなっているが、彼女の葬儀で、「クラ・カウパパ・マオリの母」であったとシャープルズに悔やまれている（The New Zealand Herald 2011)。

ワイカト大学でマオリ語を教えていたマタイラは、マオリ語話者の激減に危機感を感じていた。1973年、フィジーに滞在した際、フィジー語を流暢に話すピースコープで派遣されているアメリカ人数名を目撃し、彼らが10色のクイズネア棒を使うサイレントウェイという言語教授法で学んだことを知る。マタイラ自身もいわゆる伝統的な文法訳読法と言われる教授法でフィジー語を学んできたのに、聞いたり話したりということができず、アメリカで10週間、サイレントウェイで学んできたというアメリカ人達とは雲泥の差であった（Hond 2013)。サイレントウェイとは、数学者カレブ・ガテーニョが、算数教育のために開発した教授法であったが、言語教育にも適応され、英語教育はもちろん、日本語教育や中国語教育にも応用されている（サイレンウェイランゲージセンター 2014)。

マタイラは、ニュージーランドに戻り、1978年にペファイランギにサイレントウェイを紹介する。二人は、ワイアタと呼ばれる歌やチャント、体の動きを使った学びや、マオリ社会でのロールプレイなどを取り入れ、さらにマオリの文化やマオリの価値観に適合させ、テ・アタアランギという教授法を確立していった（ブルワートン 2013)。また二人は、テ・アタアランギの中心には、各地に残るマオリ語母語話者である年長者を置き、彼らが教員免許や資格の必要の無いコミュニティのためのカイファカアコ（学習者と同じ目線に立つ先生）となるように考えた（Hond 2013)。カイファカアコは、マオリ語を学びにくる全ての人に、安心できる環境を作りつつ、日常会話で使用する表現を話すモデルとなり、少しずつ話せる言語表現を増やしていく役割を担う。

1979年からの3年間、二人はニュージーランド中を周り、各地の年長者やマオリ語話者にこの方法論を紹介し、協議を繰り返した。今までマオリ

語に触れることができなかった大人達を中心に、誰もが流暢にマオリ語で日常会話ができるようになることを目指すこの教授法は、各地の年長者に暖かく迎えられ、またコミュニティで自分達が話さなければならないという意識を共有する大人の仲間たちを増やしていった。母語話者の年長者は、カイファカアコとなるためラーカウと呼ばれるブロックを使ってどのように教えるのか、練習を重ね、お互いの教え方を見ながら、それぞれが自分なりの教え方を開発した。また学ぶ大人達も自分たちのできるサポートを提供しながら、草の根の運動として、テ・アタアランギは国内の各地で定着した。

教育理念

1981年にテ・アタアランギは、法人登録をし、1982年には、初の全国年次会議を開催している。その頃には、テ・アタアランギの初級編の指導者教本 Te Ataarangi tuatahi: te tuara o te reo Maori（Te Ataarangi Inc. 1982）が完成している。その中では、このアプローチの説明ならびに、コミュニティでの学びと母語話者の参加の重要性を説かれている。さらにこの初級編は48課に分かれており、各課で教えるべき、日常生活の基礎表現が明記されている。しかしそこには以下の２課の例のように、その表現が書かれているだけで、それ以外のラーカウをどう使うかや、どのように各単語や表現を導入するかなどは一切書かれていない。

2. pango kakariki parauri kotahi e rua toru ….
2. 黒　緑　茶　一、二、三…

この48課に出てくるのは、テ・アタアランギ指導者が議論を重ねて作った、日常生活を送る上での最重要表現であるが、その教え方は、各カイファカアコに委ねられているのである。自分が今回担当している学習者にとっての最適な学びを常に考え、どの課からどういう順番で教えても構わないとのことである（ホンド＆ブルワートン 2014）。さらに注目すべきは、

各課で導入する未習の単語は合わせて、最大７語までであることである。例えば新しく導入する表現の文法項目に３単語含まれていたら、あと最大で４語しか導入しない。これは学習者全員がその課の表現を自分から発話できるまで、次に進まないというテ・アタアランギのアプローチに依拠している。学習者はレッスン中は、ペンも紙も持つことは許されず、自分の見たこと聞いたことだけを頼りに、発話を試み、次第に各表現を習得していく。

この教本にはさらに、議論の中で作り上げられた、学習者が奨励すべき態度というものがある。これはテ・アタアランギのホームページにも重要な学習理念として掲示されており（Te Ataarangi Inc. 2014）、テ・アタアランギで学ぶ学習者の初日に必ず言及される。

① Kaua e korero Pakeha.　パケハのことばを話さない。
② Kaua e poka tikanga　他人の慣習や信仰を尊重する。
③ Kaua e akiaki tetahi i tetahi　一人一人を焦らせない。
④ Kia ahu atu te pātai ki a koe, kātahi anō koe ka ahei ki te whakahoki
　自分の番が来たときにだけ話す。
⑤ Kia ngākau māhaki tetahi ki tetahi　お互いに謙虚であること。
（一人一人が経験する様々な感情に共感する。）

①は、英語を話さないという意味であるが、マオリ語だけを話すことで、マオリの文化や世界観のイマージョン環境を維持するという解釈ができる。②の tikanga（ティカンガ）はマオリ社会で非常によく使われる言葉であるが、慣習や信条、正しい姿勢、方法、計画、規則など様々に意味を持つ重要な概念であり、互いのやり方を尊重することの重要性が強調されている。③は、互いのペースを尊重する意味であるが、さらに未習の表現を入れないという意味も含まれる。単語力がある学習者が未習の語を使うことで他の学習者が話そうとする意欲が下がることはよくある。全員がマスターするまで次に進まないというテ・アタアランギのアプローチは、そういった

学習者の細かい心の動きに敏感に対応する。④も、皆が発言権を持てるよう、全員に話す機会を与えることが強調される。

しかしテ・アタアランギ協会理事で、マタイラの娘であるブルワートン（2013）は、⑤の重要性を強調している。ニュージーランド社会の隅々にまで英語が浸透し、学校や職場や家庭で英語だけで過ごさざるを得ず、マオリ語に触れて来なかった大人のマオリは、自分の親や先祖から伝わるマオリ語を話せないことに関して、また西洋的主流派社会で差別を受けることもあり、様々なファカマ（恥）の意識を抱えている。テ・アタアランギでマオリ語を学び、話し始めることで、人生の怒り、悲しみ、苦しみ、また時に喜びの感情を持ち、泣き出す人も少なくないというのだ。だからこそそういった様々な感情を経験する人々に共感の心を持ち、安全で安心できる環境を作ることが非常に重要であり、それはカイファカアコだけの仕事ではなく、ともに学ぶ全員に与えられる役割である。

中級編の Te Ataarangi tuarua: te tinana o te reo Maori（Te Ataarangi Inc. 1983）では語彙増強に集中する。台所でフライブレッドを作るなど、学習者が日常生活で経験する状況を、ラーカウを使って描写する。例えばフライパンを黒で作り、火を赤でまたオイルを黄で、食材を緑やオレンジでと言った具合に 10 色のラーカウを使って表し、その状況で重要な単語を導入する。さらに上級編では、創作表現や多元的に理解できる言語使用を学ぶ。具体的には伝統的な物語や、部族にとって重要な歴史上の出来事、また儀式の場のスピーチで使われるような比喩表現などがある。

また毎回のレッスンの始まりには、カラキアと呼ばれる祈りことばがあるが、これが今からマオリの精神世界に入るという合図となる。カラキアが始まると、マオリ語使用のみが許される。レッスンの終了時にも、カラキアがあり、そのカラキアが終わったところで、英語や他の言語の使用が認められる。カラキアは様々なマオリの活動や儀礼で伝統的に唱えられてきたものである。学習者は習い始めた頃、カラキアで何が言われているか分からない。しかし、カイファカアコはレッスンの中で、ラーカウを使って簡単なカラキアの説明をするため、初級編の終わりになると、学習者は 5

つ程のカラキアが言えるようになる。

コミュニティ団体としての成功とジレンマ

1979年に誕生したテ・アタアランギ協会は、現在アオテアロア各地に9カ所、またオーストラリアに移住したマオリをサポートするために、シドニーに1カ所、支部を配置し各地の活動を支えている。テ・ワイポウナム、テ・タイフ、テ・ウポコ・オ・テ・イカ、テ・タイラフィティ、タラナキ、ワイアリキ、タイヌイ、タマキ・マカウラウ、タイトケレウという伝統的に地域や方言として差の見られる9つの地域に分かれ、それぞれが独立した団体を持つ。さらにテ・コミティ・マトゥアと呼ばれる親団体の傘下に入っている。

テ・アタアランギが、現在まで約5万人のマオリ語話者を輩出した（ホンド&ブルワートン 2014）のは、優れた言語教授法であったからだけではない。テ・アタアランギ協会副代表のホンドは、テ・アタアランギが「コミュニティの誰もが参加できるようサポートし、それぞれのアイデンティティが尊重され、また内なるリーダーシップが奨励されるイマージョン環境」（Hond, 2013）を生み出してきたと評価する。ここでいうイマージョンとは、マオリ語のみという意味だけでなく、マオリ語でマオリの文化、ティカンガ、精神世界にどっぷり「浸らせる」という意味である。このように門戸は常に開かれていて、その中には安全で安心できる環境があり、様々なファカマ（恥）を持ちよった人々が継続してマオリ世界に入り込める環境を、テ・アタアランギは作り出した。

さらにテ・アタアランギの果たしてきた役割として、各地のコミュニティ再生や、都市部でのコミュニティ作りがあげられる。テ・アタアランギは、各地のマラエやその他のコミュニティが、マオリ語やマオリ文化の強化、またコミュニティの結束の必要性を感じた際にリクエストを受け、ふさわしいカイファカアコを派遣し、現地で授業を行う。例えば、ブルワートンは、ンガティ・ポロウ出身で、現在ハミルトンに在住であるが、地元ンガティ・ポロウのあるコミュニティに呼ばれ、月一度500キロメートル運

転してあるマラエで、2泊3日のテ・アタアランギの合宿を行っている。

また都市部には、テ・アタアランギの教室が開かれている。マオリ文化やマオリ語との関わりを深めたい人々が教室に通う。例えば現在ハミルトン市では、週2回午後6時から8時半までの授業が3月から11月まで30週間に渡って行われている。中級編受講中のアオテアロア大学スタッフのウォーカー（Walker, personal communication, October 2014）は、自身のマオリ語会話が上達することだけでなく、都市部で、出身地や系譜や職場も様々な人々と学べることに充実感を感じられている。お互いをホア・タウイラ、生徒仲間と呼び合い、多くの場合が、授業以外でも多くの行動をともにし、新しいコミュニティを形成する。ウォーカーとホア・タウイラの数名は、テ・アタアランギの年に一度の全国集会に、700キロメートル離れたテ・カオまでドライブすることを楽しみにしていた。ブルワートンは、このようなテ・アタアランギで生まれる繋がりを、系譜や出身地のそれでなく、価値観のつながりであるとしている。「ああ、ここにちょうど自分と同じような人がいる。同じような理念を持って、強力なサポートを提供してくれる」と、都市の多様な生活において、自分の居場所となるコミュニティを見つける。

1980年代、カイファカアコとなり教えたのは、各地のマオリ語母語話者である年長者であったが、彼らは教師になるための学校教育など全く受けていなかった。ホンドは、それが功を奏し、自分の話してきた方言を共有しつつ、価値観や伝統的な知をそのまま、自分のコミュニティの若者へと継承できたという（Hond 2013）。学校教育は、主流派社会の西洋的価値観で制度化されてきた。さらにマオリコミュニティも各地で異なる。テ・アタアランギでは、各地のそれぞれの方言を尊重しながら教えることにも重きを置いており、カイファカアコとなった年長者が、自分たちのことばで自分たちの持つ伝統的な知や精神性を、自分のコミュニティに継承し、再活性化することができた。

当時のカイファカアコはまた、退職した年長者であり、彼らは無償で教えた。各人の移動やラーカウなどの教材、またマラエに泊まり合宿形式で

学ぶことが多いが、その食事や宿泊などは、すべて個々人の自発的な活動と支持者からの寄付でまかなわれていた。しかし1990年代には、年長者が引退するに従って、彼らからマオリ語を学んだ大人達がカイファカアコとなる必要があった。テ・アタアランギでは、グループで学んだことを教え合うアクティビティが豊富にあり、またカイファカアコがどう教えるかを何度も見ているため、彼らが自分の教えるスタイルを身につけるのには時間がかからなかった。

しかし問題は、彼らが家族を養う必要があったことである。当時自身も新しくカイファカアコとなったホンドは、多くの新しいカイファカアコが、流暢なマオリ語レベルを保っているにも関わらず、社会的評価や収入が低いことに不満を持っていたと語る。テ・アタアランギが資格や修了証などを発行しないため、コーハンガ・レオやクラ・カウパパ・マオリ、ワーナンガと比べ、政府から財政的支援がはるかに少なく、彼らは他に仕事を持つ必要があった。しかしマオリ語が必要な職場でも、マオリ語が話せない大卒者のアシスタントにしかなれなかったりするなど、資格のない彼らの流暢なマオリ語は評価されず、子どももいるカイファカアコが、生計を立てるのが厳しかった。そうした状況を変えるために、学習者から授業料を取り、カイファカアコに給料を払い、プログラム修了証を発行したりするテ・アタアランギ教室が増え、また大学と提携を結ぶ支部も増えた。まず1980年代後半からワイカト工科大学と提携しテ・アタアランギの方法論で授業を行ったり、2001年からは上述のマオリ高等教育機関、アワヌイアーランギ大学でマオリ語イマージョン教育の学士を提供するに至っている。その他にも各地域で大学との提携が続いた。

年長者の多くは自分たちが始めたコミュニティの誰もが参加できる草の根のマオリ語学習の場が、授業料を払ったものだけが参加でき修了証を目指すフォーマルな学校のようになったと嘆いたと、ホンドは語る。確かにコミュニティ団体のテ・アタアランギの教育理念は、様々な制限のある学校教育には適さないと考えられる。例えばカイファカアコは、グループの全員が理解したと判断するまで次に進まないため、時間的制約はかけられ

ない。また単位や評価といったものも、グループ間やカイファカアコとの共感関係を乱す原因となる。さらに学位や修了書といった社会評価が目的化すると、学習者の動機が混同し、安全で安心できる環境作りが難しく、またマオリ語イマージョンは保たれても、マオリ文化やティカンガ、精神世界にイマージョンできているとは言い難い。加えて年長者が言うように、誰にも開かれていたはずの門戸が、一部の高等教育に時間と労力を割ける人々のためのものになり、ある種のエリート主義となってしまう。これはコミュニティとのつながりやコミュニティ再生を重視してきたテ・アタアランギにとって大きなジレンマである。一方では、テ・アタアランギの活動を持続的に続けていくために、安定した資金繰りが必要であり、また一方では、草の根のマオリコミュニティとの繋がり保ち、マオリの世界の門戸の開け閉めを自分たちで行う必要があるのだ。実際テ・アタアランギ協会は、2010年には、ほとんどの大学との契約を終え、コミュニティに仕える草の根の団体として再スタートしている。

結びに代えて（新しい動きと取り組み）

マオリ語復興の流れをテ・アタアランギの取り組みを中心に見てきた。テ・アタアランギは、とりわけ大人の世代のマオリ語運用能力を高めてきただけでなく、誰しもに門戸を開き、マオリの文化、ティカンガ、世界観を保ち続けてきた。それが功を奏し、マオリコミュニティの繋がりを再生し、都市部では新しいマオリコミュニティを作ってきた。しかしながらコーハンガ・レオやマオリ語イマージョンの学校教育に比べ、政府からの資金が乏しいなど財政的安定性に苦しみ、大学などの教育機関と提携したが、コミュニティとの繋がりを保つことが難しくなった。現在、教育機関との繋がりを断ち、コミュニティ団体として再生したテ・アタアランギ協会は、どのように財政面で持続できるかが課題である。

マオリ社会全体を見渡すと、教育機関や放送機関、さらにマラエでの儀式をのぞいて、マオリ語が主な使用言語とはなっていない。実際クラ・カウパパ・マオリの卒業生のマオリ語運用能力が下がっていると言われるこ

ともある。1840年以来の英語の浸透は、社会の隅々に進み、たとえマオリ語運用能力があったとしても、英語で社会生活を営むことが、幾世代にもわたり当然のこととされてきた。マオリ語復興の大きな課題は、社会生活の様々な場面でマオリ語使用を標準化することである。

草の根のマオリ語復興を目指すテ・アタアランギは、現在カインガ・コーレロレロという新しい取り組みに力を注いでいる。マオリ語が各家庭で実際に使われるために、2006年から始まった取り組みであるが、数家族（最小で5家族、最大で20家族）にメンターが一人付き、家庭での日常生活におけるマオリ語使用の定着を目指している。メンターの多くはテ・アタアランギのカイファカアコ経験者であり、歌やゲームなど様々なアクティビティを各家庭に提供する。また各家庭を回り、様々な相談にのるなどのサポートを行っている。ホンドは、マタイラが亡くなる直前に政府との話し合いの中で、資格や学校教育よりもむしろ、世代をまたいだコミュニティでの言語使用や「話者コミュニティ」を作ることの重要性を見直すことを強調したと言う。実際テ・アタアランギは、マオリ振興省からの資金を得て、2009年からの三年間、9つの地域でカインガ・コーレロレロ・プログラムに取り組むことができ（Timutimu et al. 2009）、さらに2013年から向こう三年間の継続的支援が確保され、2014年現在では15の地域、150の家族の参加に拡大している（Te Taura i te Reo Māori 2014）。カインガ・コーレロレロの各家庭での取り組みで、学校と社会の限られた場面だけでなく、家庭を中心に社会の様々な場面で、世代を超えたマオリ語使用が確保できるのか、今後もコミュニティのマオリ語、マオリ文化復興を目指すテ・アタアランギの動きに注目していきたい。

参考文献

Hond, R. (2013). *Matua te Reo, Matua te Tangata Speake Community: visions, approaches, outcomes*. Unpublished doctoral thesis, Massey University.

Ka'ai, T. M. (2008). *Ngoingoi Pewhairangi: a remarkable life*. Wellington: Huia Publishers.

McCarty, T. L. (2003). Revitalising Indigenous Languages in Homogenising Times. *Comparative Education*, 39 (2) , 147-163.

Pohe, E. J. (2012). *Whakawhanaungatanga A-Reo: An Indigenous Grounded Theory for*

the Revitalization of Māori Language Speech Communities. Unpublished doctoral thesis, Victoria University of Wellington.

Simon, J. A., Smith, L. T., Cram, F., Hohepa, M. K., McNaughton, T., & Stephenson, M. (2001). *A civilising mission?: Perceptions and representations of the native schools system*. Auckland, NZ: Auckland University Press.

Spolsky, P. (2009). Rescuing Maori: the last 40 years. In Peter K. Austin (ed.) *Language Documentation and Description*, vol 6. London: SOAS. 11-36

Te Ataarangi Inc. (1982). *Te Ataarangi tuatahi: te tuara o te reo Maori*. Wellington: Te Ataarangi Incorporated Society.

Te Ataarangi Inc. (2014). Learning Principles. http://www.teataarangi.org.nz/?q=about-te-ataarangi/learning-principles/ (2014/11/16 閲覧)

Te Kohanga Reo National Trust. History. http://www.kohanga.ac.nz/history/ (2014/12/05 閲覧)

Te Rito, J.S. (2008). Struggles for the Māori language: He whawhai mo te reo Māori. *MAIReview*, 2(6) .

Te Taura Whiri i te Reo Māori. (2014). *Statement of Performance Expectations*. 2014/15. Wellington: Te Taura Whiri i te Reo Māori (Māori Language Commision).

The Maori Literature Trust. (2009). Pikihuia Awards 2009 honour life work of Katarina Te Heikoko Mataira. http://mlt.org.nz/the-pikihuia-awards/the-2011-pikihuia-awards/2009-dame-katerina-te-heikoko-mataira/ (2015/1/5 閲覧)

The New Zealand Herald. (2011). Dame Katerina Mataira dies. http://www.nzherald.co.nz/nz/news/article.cfm?c_id=1&objectid=10739075 (2014/12/25 閲覧)

Timutimu, N. Ormsby - Teki, T., & Ellis, R. (2009). Reo o Kainga (language of the home) A Ngai Te Rangi Language regeneration project. In J. Reyhner & L. Lockard (Eds.), *Indigenous Language Revitalization*, (pp. 109 - 120). Flagstaff: Northern Arizona University.

Waikato Times (2011). Waikato dame, knight in honours. http://www.stuff.co.nz/waikato-times/news/5104608/Waikato-dame-knight-in-honours. (2014/12/25 閲覧)

アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム（2013）『アオテアロア・アイヌモシリ交流プログラム報告書』横浜：スペースオルタ

伊藤泰信（2009）『先住民の知識人類学―ニュージーランド＝マオリの知と社会に関するエスノグラフィ』京都：世界思想社

岡崎享恭（2011）「ハワイ先住民族の言語・文化教育システム構築過程―「先住民族教育権」の回復と言語編制の変化」『ことばと社会』(13), 30-59.

小林寿美恵（2007）「ニュージーランドのマオリ語媒体教育の役割」愛知淑徳大学『現代社会研究科研究報告』93-106

サイレントウェイランゲージセンター 「最新情報」
http://www7a.biglobe.ne.jp/~SW_LANGUAGE_CENTER/index.html
（2014/12/05 閲覧）
ブルワートン，E.（2013）「マオリから学ぶことばを取り戻す方法」東京：アイヌ文化センター .
ホンド , R. & ブルワートン , E.（2014）「テ・アタアランギとアイヌ語復興」札幌：北海道大学アイヌ・先住民研究センター .
松原好次（1994）「ニュージーランドにおけるマオリ語復権運動：Te Kohanga Reo と Kura Kaupapa Maori を中心に」『湘南国際女子短期大学紀要』（2）, 101-155
山本徳二（2007）『日本語 - マオリ語 マオリ語 - 日本語辞典』東京：国際語学社

注

1　条約はマオリ語と英語の解釈が異なるため、その主権を巡っての審議は近年にも行われている。ワイタンギ条約不履行に関する運動が 1970 年代に起こっている。

2　ヨーロッパ系のニュージーランド人

3　イマージョンとは、100 パーセントその言語に浸かるという意味で、この場合、マオリ語のみで英語は一切入れないということである。